

生涯学習情報誌

Life Learning

7 2020
Jul.
NO.359





森田 佐知子さん (高知大学 特任准教授)

今回はZoomで取材。コロナを機にオンライン研修などが進んだのは、高知のような地理的不利がカバーされると評価。

生涯学習社会におけるキャリア支援専門人材養成プログラムの 枠組み構築

—スウェーデンの事例を手がかりに—

■自分の就業経験が生涯学習研究のきっかけに

森田佐知子さんは大学卒業後IT企業に入社したが、大学で学んだだけでは通用せず、次々と新しい技術や知識が必要となることを体感した。後に人事部の新卒採用担当になったこともあり、個人のキャリア形成における生涯学習の重要性を認識。その位置づけや効果を研究したいと大学院に進学した。

現職は高知大学の特任准教授。授業は、教養教育におけるキャリアプランニングの基礎のほか、各学部の専門課程とも連携し、理工学部専門のキャリアプランニングや、SEの経験を活かして情報科学科のキャリア教育なども担当する。また、四国の国立大学が連携してエラーニングの授業を提供しており、そこでもインターンシップ入門などの授業を受け持つ。

■生涯学習先進国の北欧に学ぶ

2016年のOECDによる生涯学習参加率の調査。1位のニュージーランドに続き、2〜5位を北欧諸国が占め、何かを得たいと現地調査を始めた。北欧諸国では学習の位置づけが日本とは違い、学んだことが将来のキャリアにつながると認識されている。中学・高校からキャリアガイダンスがあり、将来の職業を意識して真剣に学ぶのだ。教育が無料であることも大きい。日本では大学院に行くに相当のお金がかかるが、社会民主主義の北欧諸国では、仕事をやめて院で学ぶこともしやすい環境だ。複線のキャリアパスと論文に書いたが、大学に入るとか企業に正規雇用されるというルートが、日本のように単線的ではな



フォルケホイスコーレのシニアコース授業風景。(上も)

ウメオ大学のキャンパスにて、お世話になったスタディカウンセラーと。

く、いろんなルートからたどり着くことができる社会になっている。

■立ち止まって学び直せる学習コミュニティ

北欧では、フォルケホイスコーレという学習コミュニティが独特。高校と大学とのギャップイヤーなどに行く若者が多いが、シニアコースやもう少し若い人が学ぶエフタスコレもある。単位や学位は取れないが、誰もが無料で学べる(多くは寄宿制で宿泊費・食費は必要)。それらを含め、多様な人々のキャリア選択を支えるのがキャリアアカウンセラーで、スウェーデ

ンでは大学の学部で養成され、博士課程もある。「キャリアアカウンセラー育成のカリキュラムも社会民主主義ならではの。訪問したウメオ大学では、近年の移民・難民の増加を受けて「社会的、文化的視点からみたキャリアアカウンセリング」という授業が新設されました。異なる社会的文化的背景を持つ人々への支援を学ぶためです。実践現場でも、社会的弱者と呼ばれる人たちが直面する課題に対処できるよう、新たなスキルの学習を促す手法が多く用いられます」

2016年から毎年訪れ、現地調査や学会参加をする。学習コミュニティに宿泊して食事を一緒に食べるなどするうちに、若い人や教師の本音や苦勞も聞けるようになったという。

■日本のキャリア支援の課題は?

日本の若者は、大学卒業で教育が分断されてしまいい、就職するとその企業で必要なスキルをまたゼロから学ばなければいけない。特に文系の学部出身者はそう感じている。その後も、人材教育に熱心な企業であれば社内研修を受けたり、経済的余裕があれば大学院で学んだりも可能だ。しかし、高校や大学を中退した人、外国人、障害者などが、大学に入りたい、正規の仕事に就きたいと考えた際、支援を受けられる機会は非常に少ない。目の前の人がキャリアを切り開くためにどう学んでいけばよいか、ともに考えるキャリアアカウンセラーの養成が必要と、森田さんは訴える。

「財団の助成もあって現地調査や執筆が進んだ論文は、学会誌への掲載が決まりました※1。今後はこの研究をもとに、専門人材養成プログラムの設計やセミナーの提供を行っていきます」